

第26回全国スプレーギク鹿児島大会に参加して

～全国第2位のスプレーギク産地である鹿児島県で開催された全国大会～

山口徳之（農業農業総合試験場 園芸研究部 花き研究室

前・農林水産部園芸農産課）

【平成26年4月15日掲載】

【要約】

愛知県に次ぐスプレーギクの産地である鹿児島で全国大会が平成25年11月26日から27日まで開催された。産地発表、分科会などの研究会の参加、現地視察では硬質プラスチックハウスでの栽培風景や鹿児島県農業開発研究総合センターでの育種を始めとした研究の様子を見学した。

1 はじめに

スプレーギクは、輸入切り花の増加や、燃油をはじめとした生産資材の価格上昇により、経営環境は厳しさを増している。

そのような状況の中、「心と心 過去と未来 つなぐ花の力」をテーマとして、鹿児島県で開催された「全国スプレーギク鹿児島大会」に参加したので、その概要を報告する（地元関係者含め約300人参加）。

スプレーギクの主な都道府県別作付面積及び出荷量				
都道府県名	作付面積(a)	順位	出荷量	順位
栃木県	7,880		24,400	
群馬県	2,920		9,070	
長野県	1,090		3,500	
静岡県	2,620		8,120	
愛知県	21,100		87,600	
和歌山県	3,860		13,000	
広島県	2,000		4,330	
福岡県	1,880		7,190	
鹿児島県	16,200		57,000	
沖縄県	2,770		9,950	

出典：農林水産省花き生産出荷統計（平成24年産）

鹿児島県は、温暖な気象条件の下、南薩、大隅、奄美地域を中心にキク等の切花や観葉植物などの生産が行われている。中でも、スプレーギク生産は、愛知県に次ぐ作付面積、出荷量がある。

なお、最近の同大会は洋花的な新しい用途の拡大を目指し「スプレーマム」（マムとはキクを意味する言葉で、キクの学名Chrysanthemumクリサンセマムから使われるようになっていた）を大会名に使っていたが、今大会では、和的なイメージや仏花的要素を見つめ直し発信する意味で、あえて「スプレーギク」を使っている。

2 大会の日程

平成25年11月26日（火） 研究会（城山観光ホテル）

11月27日（水） 現地視察（指宿市、曾於市及び鹿屋市）

3 研究会の概要

式典の後、産地発表や分科会が行われた。

なお、式典の中で、本県豊川市の牧野貞夫氏が、JAひまわりスプレーマム部会を始め愛知県の産地発展に寄与した功績により、功労者表彰を受けられたことを申し添える。



写真1 研究会で展示されていた鹿児島県育成品種

(1) 産地発表

4地区（栃木県JAはが野真岡花卉部会、愛知県JA愛知みなみ渥美スプレーマム出荷連合、鹿児島県沖永良部花き専門農協キク部会、鹿児島JAそお花き部会スプレーギク部門）から、産地の取組について発表があった。

JAはが野から発表された複数の花色の品種をミックスして出荷する「アンサンプル」（生産者が共選品のミックス品を出荷し、集荷場でJA担当者が色バランスを考慮して詰め直す）出荷の事例や、JAそおから発表された鹿屋市農業公社におけるイターン就農者がスプレーギク栽培に取り組んでいる事例など興味深い発表があり、多くの質問が出されていた。

(2) 分科会

分科会は、病害虫や燃油高騰対策、電照技術、施肥管理・土づくり、水管理の技術関係5分科会と販路拡大や品種戦略などについて意見を交換するマーケティング部会が行われ、私はマーケティング部会に参加した。

主な意見としては、

- ・生産者自らが行っているPR活動について、「大切なことではあるが、本当に生産者が行わないといけないのか。他の花きにも言えることであるが、市場と産地の役割分担ができないか。」
- ・「確かに価格は安い時が多いが、輸入切り花が増加している中でも、そんなに国内生産が減っているわけではない。スプレーギクの消費の裾野は広がっている。国内でしか作れない品種の選定など、輸入切り花との共存はできるのではないか。」
- ・「今出された意見について、日本花き生産協会スプレーギク部会として、ビジョンを示すべきではないか」など、活発な議論が展開された。

4 現地視察

現地視察は、「曾於・鹿屋コース」と「指宿コース」の2コースが設けられ、私は「指宿コース」に参加させていただいた。

降灰や消費地から遠いというハンデキャップにはあるが、補助事業を活用しながら栽培が行われていた。



写真2 硬質プラスチックハウス（右は風による火山性の小石の吹きつけを防ぐネット）



写真3 鹿児島県農業開発総合センターでの試験風景（品種比較）

鹿児島県農業開発研究センターでは、多くの品種が育成されている。秋系では、「モゼセレクト」などのモゼシリーズ（施設栽培向け）と「きゅらキララ」などのきゅらシリーズ（奄美地域の露地・平張簡易ハウス向け）で、25品種が育成されている。また、夏秋系では、「サザンプラム」などのサザンシリーズが29品種育成されている。展示してあった切り花は、いずれも花色、ボリューム感とともに非常に優れており、レベルの高さが感じられた。

センターでは品種比較圃場の他にI P M防除体系の展示試験圃場も視察したが、いずれも栽培技術レベルが高く、これが全国2位の産地を支えていると感じた。

5 感想等

スプレーギクの生産者は花きの中でも若い方が多く、また輸入量が増加する中でも極端に国内生産量が減っているわけではない（需要が増えている）。今回の大会で意見交換された事項に基づき工夫することで、生産に更に活気が出てくるものと思われる。

今回の視察等で得られた知見等を、業務の中で活かしていきたい。



写真4 鹿児島県農業開発総合センターでの試験風景
(I P M防除体系)